

フ
エ
デ
リ
コ
・
ガ
ル
シ
ア
・
ロ
ル
カ
の
青
年
時
代
の
未
刊
の
戯
曲
『
愛
に
つ
い
て
。
動
物
た
ち
の
戯
曲
』
『
亡
霊
た
ち
』
『
エ
ホ
バ
』

森
直
香

【翻訳】

フェデリコ・ガルシア・ロルカの青年時代の未刊の戯曲

『愛について。動物たちの戯曲』『亡霊たち』『エホバ』

森 直 香

解説

フェデリコ・ガルシア・ロルカは、一九一六年ごろから熱心に執筆に取り組み始め、様々な詩、散文、戯曲を残したが、これらの大半は長い間、未刊行の状態にあった。戯曲の場合、最初にその存在に言及したのはイアン・ギブソンによる伝記『ロルカ』(Ian GIBSON, *Federico García Lorca: A life*, London, Faber and Faber, 1989, 内田吉彦、本田誠二訳、中央公論社、一九九七年)やエウテリシオ・マルティンによる『注釈つきアンソロジー』(*Antología comentada II. Teatro y prosa*, ed. de Eutimio MARTÍN, Madrid, Ediciones de la Torre, 1989)などであった。『注釈つきアンソロジー』には今回翻訳した『愛について。動物たちの戯曲』(*Del amor. Teatro de animales*)『亡霊たち - 詩』(*Sombras. Poema*)などの作品の一部が収録されている。また、一九九〇年に刊行されたアンドレ・ブラシッシュ編集のフランス語の『全集』第二巻(*Oeuvres complètes II*, ed. de André BELAMICH, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade)には、『亡霊たち』などの戯曲の一部が収録された。その二年後にスペインで出版されたシゲル・ガルシア・ポサダ編集の『全集』第五巻(*Obras V, Teatro 3*, ed. de Miguel GARCÍA-POSADA, Madrid, Akal, 1992)ではマルティンの版を補完した『亡霊たち』の完全版が収録された。さらに、一九九四年にはアンドレス・ソリア・オルメドが、ガルシア・ロルカ財団に保存されているすべての原稿を『青年時代の未刊の戯曲』(*Teatro inédito de juventud*, ed. de Andrés SORIA OLMEDO, Madrid, Cátedra)として出版した。その後、

一九九七年の『全集』第四巻 (*Obras completas IV, Primeros escritos*, ed. de Miguel GARCÍA-POSADA, Barcelona, Circulo de Lectores, Galaxia Gutenberg) にはソリアが収めた戯曲に加えて、ロルカ財団が保管していなかった『原始的感情についての戯曲』(*El primitivo auto sentimental*) も収録された。

『愛について。動物たちの戯曲』の手稿は全一一頁で、一九一九年五月二日の日付が付けられている。『亡霊たち』は全一五ページで一九二〇年二月九日付で、『エホバ』は全一二頁で一九二〇年五月六日に書き始めたと記してある。ロルカ作品の特色のひとつは伝統的なカトリックの教えとは異なる原始的な世界観であるが、これらにはその萌芽がうかがえ、興味深い。たとえば、『愛について』では『蝶の呪い』と同じく登場人物が人間以外の生き物で、彼らは創造物の頂点とされる人間の地位に疑問を抱き、反乱を計画する。『亡霊たち』では死者が人間以外の事物も含めた様々なものに転生する。『エホバ』では神がわがままでもうろく気味の老人として皮肉交じりの調子で描写されている。さらに、いずれの作品でも神の存在に疑問を呈したり、否定したりする者たちが登場する。このように、これらの作品では反カトリック的ともとれる思想がかなり直接的な形で表現されているのである。

なお、今回の翻訳ではソリアの版を底本とした。

『愛について。動物たちの戯曲』(*Del amor. Teatro de animales*)

(舞台は穏やかな雰囲気にあふれた小道である)

一

鳩と豚

鳩 (優美に翼をはためかせながら)

すごく美しい朝！なんて穏やかな小道！地上には鳩しか住んでいないみたい。それに、今日の太陽！とても暖かく気持ちの良い今日の太陽。こんな日は空を飛ぶのも心地いいわ。

(一匹の年老いた、悲しそうな様子の豚が、つらそうに小道からやって来る)

豚 おはよう、鳩のお嬢さん。ひなたぼっこかね？

鳩 そんなところですわ、豚のおじいさま。太陽がなければ、私たち鳩は生きていけないでしょうね。

豚 みんなそうだよ。

鳩 あら、おじいさま、それは大きな間違いですわ。もちろん、太陽の光のおかげですべてのものが実をつけます。太陽がなければ、地上は誰も生きられない荒れ地になってしまうでしょう。その暖かさと周期はすべてのものに等しく降り注ぎます。私たちの魂は生の旋律で、太陽は完全なる調和なのです。人間の中には、物事の本質を探り当てる素晴らしい才能を持った人もいます。その人たちは芸術家と呼ばれるのです。何人かは私の友人でした。

豚 すまんが、その話がどう関係あるのか分かんのだが…。

鳩 親愛なるおじいさま、大いに関係ありますわ：芸術家たちが、青い空、花々、水を表現するように、私たち鳩は太陽の本質を探り当て、太陽の金の愛撫、沈黙、歌声を地上で誰よりも強く感じるのです…。

豚 なあ、おまえは色々な所に飛んで行き、楽しんできたものの、おまえのように太陽の秘密を探り当てることはできないのだよ。このことで人間の恐ろしい貪欲さから逃れてきたものの、おまえのように太陽の秘密を探り当てることはできないのだよ。それはわしのせいではないし、空におわす偉大なる豚様もわかっておられることだ。わしは目が弱ってしまっ、太陽の光に慰めと心地よさを感じるどころか、目がひりひりするんだ。それに、わしはそういう魂のことに関わることはなかった…。不幸にも、われわれの種族は、いつも人間から血なまぐさい脅しを受けているんだ…。人間は残酷だよ…。

鳩 人間が残酷なのは、すべての生き物には残酷さが備わっていて、その残酷さがほかの生き物よりも強い生き物もいるからですわ。

豚 残酷さは存在するだろうよ。でも、おまえにはないよ。おまえには悪の片鱗もない。

鳩 そんなこと、絶対に言わないでください。私の餌になる蟻さんが、実はひなたぼっこやナイチンゲールの歌を聞くためにかわいい子供たちを散歩に連れ出してあげる優しいお母さんじゃないなんて、どうして言えますの？ええ、そう、私たちはみんな残酷、生まれつき残酷なのです。ねえ、太陽はすべてにとってよいものではないのですか？

豚 そうだろう。

鳩

ええ、それでも、一年のうちには私たちが太陽のまなざしから隠れないといけない時期もあります。だって、そうしないと死んでしまいますから……あまりにも太陽の力も光も強いから……。

豚

だがね、みんな自分の経験でものを言うものなんだよ。わしにもささやかな意見はあるんだ。人間は個人差があるとはいえ邪悪で、下劣で浅ましい感情しか持たないんだよ。

鳩

大げさだと思えますわ。人間には不死の魂がありますし……。

豚

鳩のお嬢さん、最後まで言わせてくれないか。考えてもみてくれ、わしは人間と長い間暮らしたし、奴らの悪意を観察する機会もあったんだよ。わしがどんなに苦しんだか、おまえにわかってもらえたらいいが！豚小屋の陰でわしがどんなに泣いたか！そして、この先もわしがどんなに苦しむか。

鳩

かわいそうな豚のおじいさま！皆、おじいさまがどんなにひどい目にあったか、わかっていますわ！おじいさまはそんなに痩せているから、誰にも看取ってもらえずに掃き溜めで死んでしまうあの野良犬たちの仲間みたいに見えます……。

豚

お嬢さん、その通りだよ。でも、痩せているおかげで命が助かったんだ。だが、いっそ子豚の頃に死んでしまいか、生まれてこなかった方がよかったよ。

鳩

ねえ、そんな風に泣かないで下さい！あの小道や、空や木々を見て下さい！どんなに平安を感じさせるか！幸せになることを考えて下さい……。

豚

幸せになれたらどんなにいいか……だか、もう遅すぎるし、心はずたずただよ。わしら豚にも心はあるんだ。人間はそう思っていないがね……。なあ、悲しいことにわしは母の顔さえ知らないんだよ……。生まれたばかりの頃、人間たちが食肉にするために殺したんだ。わしらは七人兄弟だったが、ばらばらに別々の家に連れて行かれた。母の友人の雌豚がわしのことを育て、母の思い出を大切にするよう教えてくれたんだ。この雌豚には四匹の子どもたちがいて、わしはその子らと一緒に育ったが、彼らをとっても好きだったんだよ。夜、あたり一面が真っ暗になって、野では物音ひとつ聞こえない時間になると、わしの育ての母はあの長い体を横たえて、ぶるぶる揺れる丸い胸をわしらに差し出して、言ったもんだ。「子供たちよ、お飲みなさい！」わしらは互いにぶつかり合いながら、狂ったように喜んで鼻先をくっつけて甘くて温かい乳を吸い、そのうち育ての母の心を揺さぶるような鳴き声を聞きながら眠ってしまったものだ。なんと幸せだったことか……！ある晩、育ての母は柔らかな乳房を見せながら、とても悲しそうに言ったんだ。「子供たちよ、私が人間の餌食になる 때가来てしまった。不幸なことに、おまえたちも同じ行く末をたどるでしょう。天におわし、疑いの余地のない慈悲の心を持つあの方が私たちを

豚 鳩

救い出すために地に降りてきて下さるその日まで、私たちの種族はこの恐ろしい責め苦を負う運命なのです。お前たち、いい子にして、私のことをいつも思い出して。親の愛は一生忘れてはいけないよ。最後に私の乳を吸って、お休みなさい」わしの育ての母の目は涙であふれ、震える鼻先からは血の泡がわき出していた。

かわいそうに。

わしらは鳴き始め、狂ったように育ての母の腹や背に口づけていたよ。育ての母には昔からの友人の雄鶏がいたんだが、明け方、大声で鳴いてこう言ったんだ。「あんたを捕まえに来るぞ！あんたを捕まえに来るぞ！」そして、わしらは、誰にも聞かれないのか、雌鶏たちが声にならない声をあげて泣くのを感じた。そのうちの一羽が言った。「私たちの奴隷生活はいいつ終わるの？」そして、別の雌鶏が答えた。「空におわすあの方が十分にあわれたと感じられるまで」雄鶏の泣き声はさらに大きくなっていった。「あんたを捕まえに来るぞ！あんたを捕まえに来るぞ！」

豚 鳩

怖い！怖いわ！

それから、豚小屋の戸が開き、恐ろしい二人の男が入って来た。一人はナイフを手にして、血まみれの服を着ていた。もう一人は太いロープを持っていて、それを育ての母の片方の脚に結びつけた。外では、せわしく走り回る音、子供たちの笑い声、娘たちの歌う声、雌鶏たちの悲しい泣き声が聞こえていた。育ての母は戸の所まで引っ張られて行った。かわいそうな育ての母は声もなくうめいた。豚小屋の外に出されようとしていたとき、わしらの絶望に満ちた嘆願とどうしようもない悲しみの声を聞いて、彼女の嘆きは胸を引き裂かんばかりになった。育ての母は頭を上げ、彼女を引きずって行こうとする人間たちに抵抗した。そのとき、わしは心臓を誰かの手でえぐられるような気がした。人間たちの哀れを誘えるよう、人間と同じように話せたらと願ったが、すべては無駄だった。育ての母はすでに豚小屋の外だったのだ。苦悩に満ちた沈黙の後、わしらは再び育ての母が力強く、しかし絶望して鋭い声で叫ぶのを聞いたが、その声はゆっくり消えていった。それが死だったのだ。それから、大勢の笑い声とギターを鳴らす音が聞こえた。兄弟たちとわしは豚小屋の奥に逃げ込んで、つらい気持ちで泣いていた。とてもやさしい母だったのに……それから、わしらは彼女のとても甘くて温かい乳を飲みながら、共に過ごした夜を思い出し、口づけや優しく噛みつかれたときのこと、賢明な助言、眠気を誘うような歌声を思い出した。すべては永遠に消え去ってしまった。その時、一羽の老いた雌鶏が入ってきたが、彼女は飼い主の息子に片目をつぶされていた。彼女はこちらにやってきて、ひどく嘆き泣きながら、わしらをやさしくつついた。「なんていまましい！なんていまましい！」と言っていた。「私から幸せを奪っていくんだよ！お前たち、これ以上泣いてはいけないよ！彼女はもう安

息に入っているだろうが、私らは違う。私らは苦しむために生き残ったんだ！」そのすぐ後、突然家の飼犬が育ての母の死を祝って歌っているのを聞いた。雌鶏は真顔になって、叫んだ。「あいつもいまいい奴だ！人間の友人で、私たちの敵なんだ」もう夜が明けるところで、遠くで鐘が鳴っていた。そのときから、わしは人間と犬を憎んでいるよ。

おじいさまがおっしゃるんですもの、言っておられることは正しいですわ。でも、わたしは全く逆のことを言わないといけませんの。人間は私を愛の象徴、神様の象徴にしました。私には知恵があり、私は光のようなものです。なのに、私は人間に関心がないのです。愛しても、憎んでもいません。人間より大切なものがたくさんあるんです。

豚 お前こそが、純粹で永遠の命を持つ者だ。

鳩 おじいさまと同じように、私もいつかは死んでしまう存在です、豚のおじいさま。

決してそんな風に考えてはいけません。おまえはその汚れない羽根に日の光を受けることができるし、太陽の唯一の本質を言い当てることもできる。お前は青空の向こうに消えてしまうほど高く飛べるし、誰よりも愛することを知っているのだから、この世から消えてしまうなんてことはあり得ないよ。もしお前が一瞬でも幸せを感じたなら、永遠の命を手に入れるだろう。だって、一度でも完全さの静寂に魂を浸したことがある者が死ぬなんてことはあり得ないだろうからね。

鳩 それなら、おじいさまだって永遠の命を得られますわ！

豚 わしが？絶対無理だよ。生まれてからずっと、泥の中で生きてきたんだ。

鳩 そんなの関係ありません、おじいさま。おじいさまにとっての泥は、私にとっての空気や薬でできた巣と同じですわ。

豚 だが、泥は泥だ。わしは善良で穏やかにもなれたはずだが、人間が「そう」なるのを邪魔したんだ。今のわしの魂は憎しみでいっぱい。幸せにはなれないよ。

鳩 誰がおじいさまにそんなに悲しい考えを吹き込んだのでしょうか？人生は美しいものです。

豚 わしは苦しみによって思索することを学んだよ。わしの知り合いに懷疑主義の哲学者で、森で隠匿生活を送っている年老いた雌豚がいるが、彼女がわれわれの内面にある闇についてを教えてください。

鳩 落ち着いてくださいな。おじいさまは、まだ幸せになれますわ。

（道に長い沈黙が流れる。空は青く、その中で夢見るようにまどろみ始める）

鳩　ところで、豚のおじいさま、どこに行かれるのか、お聞きしていませんでしたわ。ご旅行ですか？それとも、急なお仕事へ行かれるのでしょうか？

豚　すべての動物が人間との闘いのために大集会を開くと聞いて、わしも行くことにしたんだ。言いたいことはたくさんあるからね…。

鳩　私もちょうど集会へ行くところですよ。

豚　一緒に行こうか。その方が道中楽しいだろうよ。

鳩　豚のおじいさま、人間との闘いのために集まること、私たち動物に何かの役に立つと思われますか？

豚　もちろん、大いに役立つさ。

鳩　でも、全く何にもならない「と思うの」です。おじいさまたちの情熱はとても強くて、人間を傷つける前に、仲間同士で傷つけあってしまうかもしれませんし…それに、何のためなのでしょう？

豚　何のためかだと？わしらは抑圧され屈辱を受け、自分自身の意志で感じることも考えることもできないのだぞ。全てのものに、人間の文明の憎むべき痕跡がある。人間を滅ぼすか、わしらの奴隷にしなければならないんだ。今度はわしらが平穩に生きる番だ。

鳩　空はこんなに美しい青さで、その中に永遠に沈み込んでしまいたいと強く感じますわ。

豚　そうすれば、わしらの食べ物も改善されるし、ねぐらもよくなるだろうよ。

鳩　太陽のなんという美しさ！私のために光が作られたんだわ！光こそが私の生命。

蟬たちのクロス　光よ、光、これ以上われわれを苦しめないでくれ！ああ、無慈悲な神々よ、われわれを太陽の歌と火から自由にしてくれ！おお、すばらしき静寂よ、われわれにその影のマントを与えてくれ…！

（小道からロバがゆっくりやって来る）

ロバ 聖なる鳩よ、お前の光がお前とともにあるように。わが兄弟、豚よ、調子はいかがかな。

(鳩は羽根を動かし、豚はお辞儀をする)

ロバ あんたがたも、集会へ向かうところかね？

鳩 ええ、そうです。

豚 あんたはたくさん言いたいことがあるのかい？

ロバ わしはとてつらい目にあったから、たとえ千日間話し続けても、苦しみの全てを言い尽くすことはできないよ。だが、わしは義理で集会に行くんだ。

豚 どういうことか説明してくれ。

ロバ つまり、自分の意志には反するが集会に行くんだよ。はっきりした結論は何も出ないと思うね…それに、わしにしたら、物事は今のままでいいんだ。わしは従順で善良だし、耐え苦しむために自分が生まれたこともわかっている。いずれにせよ、わしは人間に対してある種の愛情を感じているんだ。叩きのめされたこともよくあったが、逆に、わしのくせ毛のたてがみをやさしく撫でてくれる時もあったからね。それに、人間はわしよりもずっと賢い。神はそれなりの理由で人間を創造物の王にしたんだ。

豚 わしは集会で反抗、憎悪について発言するつもりだ。わしらの種族の仇をとるため、人間の奴隷化に賛成するんだ。

ロバ 言葉に気を付けるんだ。人間の神がわしらを罰するかもしれない。

豚 嘘だ。人間の神なんて存在しないさ。人間の作り事だ。

ロバ お願いだ、黙ってくれ。わしはあんたの憎しみの言葉を聞くわけにはいかない。わしらの種族はほかでもない人間の神に仕え、彼をたたえるという栄光に浴したのだ。人間たちの神はある春の朝、自分の街に入るとき、わしらの祖先にあたる雌のロバの背に乗った^二。わしは、母がその神の声は新鮮な干し草よりも甘やかだったとは話すのを聞いたことがある。

二 イエス・キリストはロバの子の背に乗ってエルサレムに入ったとされている。「マタイによる福音書」二二、マルコによる福音書一一、ルカによる福音書一九、ヨハネによる福音書一二参照。

豚 言い伝えだ！ただの言い伝えだよ！

鳩 落ち着いてくださいな！空があんなに青いですよ！

ロバ もう黙った方がよさそうだな。

豚 そうだろうな。（小声で）臆病者め…。

（緑のポプラの木に一匹のナイチンゲールが止まっている）

鳩 ナイチンゲールさん、私たちと一緒に集会に来ない？

ナイチンゲール それって歌の集会なの？

豚 歌やそういうくだらないことの話をしている場合じゃないんだよ。人間を滅ぼすか、奴隷にする話をするんだ。だから、行こう。回りくどいのはやめようじゃないか。

鳩 私たちと一緒にいらっしやい。

ナイチンゲール 絶対に行かない。興味が無いんだ。

豚 おまえはわしらよりも自由だからな。おお、幸いなる翼よ！だが、おまえは自分勝手だよ…。

ナイチンゲール 僕は憎悪の集まりでは場違いだろう。愛のためだけに生きているんだ。

豚 わしに翼があれば、力づくで来させるんだが。

ナイチンゲール だからねえ…（豚から離れて、鳩に向かって）僕にあんな話し方をしてるけど、あいつは誰だい？

鳩 豚よ。

ナイチンゲール 嫌なごろつきだな！

鳩 負け犬なのよ。

ロバ 道草はよそう、まだ道のりは遠いんだから。

豚 前に進もう。

鳩 なんて美しい青い空！

ナイチンゲール 僕の心が光であふれますように！おお、聖なる歌よ…！星たちは、僕たちの種族の歌が石になってできた。僕

は風の音楽だ。僕の歌は光だ、色彩だ。僕の喉からもれる音符のひとつひとつが、月の光の中で揺れる真珠だ。暗い夜には、僕の歌声は光のしずくだ。最初のナイチンゲールは青い空から落ちてきた。僕の喉は、水と影でできている。

(風が木々の葉と収穫間近の麦畑を揺らす)

(静寂の中、蟬のコロスが響く)

蟬たちのコロス 光よ、光、これ以上われわれを苦しめないでくれ！ああ、無慈悲な神々よ、われわれを太陽の歌と火から自由
にしてくれ！おお、すばらしき静寂よ、われわれにその影のマントを与えてくれ！

(鳩は遠くへ飛んでいき、ロバと豚は砂埃を立てながら進んでいく)

幕

一九一九年三月二日

『亡霊たち - 詩』(Sombres. Poema)

登場人物 亡霊一／亡霊二／亡霊三／亡霊四／亡霊五／亡霊六／「年老いた亡霊」／ソクラテスの亡霊／子ども／庭師
影たちの会話・散文詩

「第一幕」

(舞台は古い庭園である。退屈な調子の音を立てる噴水と大きな大理石の机。物思いにふける木々の枝の間には奇妙な霧のかけ
らがいくつもある)

(亡霊たちが入場)

亡霊一 (入場しながら) もしよかったら、この庭で少し休もう。

亡霊二 なんでも君はこれが庭だと分かったんだい？

亡霊一 水が流れる香りがするし、とても落ち着いた感じがするからさ。

亡霊二 私は何も気付かなかったな。

亡霊一 君は知り合って以来、質問しかしないね。君って無礼だよ！

亡霊二 私は混乱してるんだ！それにときどき、正直に言おうと、自分がまだレタスのような気がするんだよ。不死とはなんと悲しいものだ！

亡霊一 それなら、ちょっとはもう慣れてもいい頃だろう！

(他の亡霊たちと一緒に離れていく)

亡霊三 ああ、でもあなたはレタスだったのですね！

亡霊二 あなた、おだまりなさい！死ぬことほど最低なことはありません！人は口も歯もなくしてしまうまでは、食べるというのがどういふものかわからないものなんです…。

亡霊三 全くあなたのおっしゃる通りですよ。まったくその通りです。こんなふうには霊的ハム、霊的桃しか食べないというのは…。

亡霊二 すべて同じ味がします！

亡霊三 実際、耐えがたいものですよ！

亡霊一 それでね、あなたに申し上げていたように、私はレタスだったんですよ。考えるだけで、ぞっとして全身の霧が逆立ちます！私の葉がちぎられるたび、あるいは私の白い心臓が齧られるたび、何とつらい思いをしたことか！この永遠の命というのは、お話しできるほどいいものではありませんよ…。人間だったときは、私はどんなに楽しく過ごしたことか！

亡霊三 そして、一番恐ろしいのは自分が次に何になるのか想像することですよ！まだ私は生まれ変わりを体験していませんが、

恐ろしいです…その反面、とにかく何でもいいから何かになりたいと思っていますけどね。これ以上、失業中の亡霊にいるのには耐えられません。

亡霊二 私は君たちにできるかぎり亡霊の状態にいるよう助言しますよ。あなたはレタスになってスペインの町つまらない弁護士か、子持ちの司教座聖堂参事会員の齒の間に挟まってしまいうことが、どんなことかご存じないんですよ。

亡霊三 そんなこと知る必要ありませんよ！私の旅の連れにスペインの大臣の魂がいて、ついでに言うマラゲーニャ^三を上手に歌う人だったですが、彼は、きゅうりの後にかぼちゃ、そして続いて、あなたには想像もつかないでしょうけど、ゆで卵に生まれ変わったと語ってくれましたよ！

亡霊二 本当に悲しいのですよ…！それが私はね、親愛なる幽霊の友よ、正直に言うとは呆然としているのですよ。何が起きているか全く理解できませんよ！私の会った亡霊のそれぞれが違うことを言うし、違った様子なのです。この間の休みには、まだ神を信じている亡霊と出くわしましたよ。

亡霊三 アロイシウス・ゴンザーガ^四を信じる少年の魂だったんでしょう…。

亡霊二 それはいいでしょう、聖アロイシウスの信者は、この種の場所に来て彼がとても純粋なのを見たとなん…、がっかりして何も信じなくなるんですよ…。

亡霊三 あなた、お黙りなさいよ。かの有名なゴンザーガは、雲のはざまをうろつく霊の中でも一番のプレイボーイですよ…。

亡霊二 彼の中では他の霊にはないものが育くまれているのです。色欲です…。

亡霊三 (ある種の皮肉を込めて) / 地上でどんなに笑っていることでしょうか…！

亡霊二 ある程度はね、友よ、ある程度はですよ…！ / (思い出す) / 私は給料が六千レアルの大蔵省のあわれな事務員でした…。

亡霊三 (話をさえぎり) / 私は、フランスの貴族でしたよ！

亡霊二 君たち、思い上がった態度や、気取って口ひげを上向きにセットするようなことはやめましょう。もうみんな同じ立場なんですから。

亡霊三 (小声で) / 厄介なこった！

三 アンダルシア州マラガ地方の舞踊と舞曲。
四 一五六八〜一五九一年。若者の守護聖人。イタリア出身。

亡霊二（思い出しながら）／まだ地上に残っていたらよかったのですがね！あのアルカラ通り^五！パラセデス・マテオ・サガ

スタ氏^六のあの時代……私はサガスタ首相時代の人間ですから……！今や政治家もいないでしょうね……私は何と哀れな……。私の人生はなんと素敵だったことか！六千レアルしか稼ぎはありませんでしたが！しかし、ある朝、起きると体中が痛んで、目は飛び出し、歩くことすらできなかったのです……。言葉にできないほど苦しみながら何日もベッドに横になっていました。ある朝（私にとっては恐ろしい朝だったのですが）、がたがたの歯並びの下品で薄ら笑いを浮かべた女性が刃の欠けた鎌を手に私の部屋に入ってくるまでは。その女性は親しみすらこもった口調で私にこう言いました。「さあ、ペレスよ、お前のしわだらけの肉体を哀れな虫たちの餌として差し出すときがやって来たよ。これは全く理にかなったことなんだ。そして、新しい感動を探して世界中を少し飛びまわるのだ……。素直にして、私にこの敬うべき道具でお前の首を切らせておくれ……。結局、スペイン人にとって死はとても楽しいものに違いないよ。由緒正しい冒険者の魂は、闇を前にしてわくわくするはずだ。スペインが今まで幽霊の国を支配し植民地にしようとしなかったのは、妙なことだね！」「それは、昔のことでございます」と、私は怯えながら答えました。「しかしね」と、その女性は恐ろしい声で言ったのです。「マルティネス・カンポス^七將軍は、クリストファー・コロンブスよりも偉大なんだ」……それから、その女性は立ち上がり、部屋の中を大股で歩き回り、言葉につかえながらもこう言っていました。「そうとも、あなたは月に行かなくちゃならない、そうだ、月だよ。それとも、シリウスに行く方がいいかねえ。シリウスはいいとこだよ。さあ、月に行く用意をしろ」その恐ろしい女性は刃の欠けた鎌を私の頭上に振り上げ、私は恐怖で叫びました。「やめてください、あなたは優しい方です。私は月には行きたくありません。大蔵省に残る方がいいです」「馬鹿をおいいでないよ！」と、女性は怒り、叫んでいました。「やっぱりお前はスペイン人だね！」私は彼女にこう懇願しました。「私には旅の才能はありません。まだ私を殺さないでください。せめて、年金生活の準備ができるまで待ってください！」「許すわけにはいかないね」と彼女はうなりました……。その時、私はその女性が数日前に亡くなった私の上司であることに気が付きました。彼はいつも恐ろしい目つきで私を見て、こう言っていました。「ペレスさん、今日は一時間遅刻なさいましたね……」その後、彼女はアルフォンソ一二世^八に姿を変え、その後、フラ

五 マドリードの主要な通りのひとつ。

六一 一八二五〜一九〇三年。スペインの政治家。一八七〇年から一九〇二年の間に七回首相を務める。

七一 一八三二〜一九〇〇年。スペインの軍人、政治家。

八一 一八五七年〜一八八五年。スペイン国王。在位は一八七五年〜一八八五年。

スクエロ^九になりました……。私の目の前は真っ赤でした……。それから、頭が強打されるのを感じ、全身がしびれ、耳のそばできんきん叫ぶ声が聞こえました。「かわいそうなペレス、かわいそうなペレス……！」何より不思議だったのは、この次の瞬間、シュッと、自分が知らない間にレタスに変わっていたのに気が付いたのです。そして、また別の恐ろしい苦難に遭い、今はビルバオの小広場やヌニェス・デ・アルセ^{一〇}の詩を懐かしむさまよえる魂として、あなたの前におります。

亡霊三 そんな気持ちでいるなんて、尊敬に値しますよ！

亡霊二 この来世というのには失望させられましたね！

亡霊三 我慢強くなるのです。まだ何かいいこともあるかもしれませんよ。私は神と会うという不可能にも思える希望を抱いておりますよ！

亡霊二 会えたらよいですが！

亡霊三 こんなふうに理由もなく行ったり来たりするのに意味などありませんよ。こんなふうにきゅうりに生まれ変わったたり、インドの踊り子に生まれ変わったたりするのは。私はある程度は満足しているんです。だって、正直に告白すると来世など信じておりませんでした。私の妻の愛人に決闘でモーゼル銃を向けられ、銃弾を二発頭蓋骨に受けた後、自分が踊り子の衣装やレビ人の政治家の服であふれかえったとても奇妙な野原にいるのに気づき、どんなに心地よい印象を受けたかあなたには想像もつかないでしょうね。そこには口紅を塗って段ボールの羽を身につけた若い女性の姿の天使がいて、私にこう言いました。「あなた様はもう亡霊です。雲へ、永遠へ行くのです。リユーマチにお気をつけて……」それは大きな驚きでしたが、嬉しくもありました……。私は物質主義者で、ヴォルテール主義者^二で……。ほとんど、ほとんどですね、神が存在する可能性を信じているのですよ。

亡霊二 そんなことを大きな声で言わないようにして下さい！私は、全く疑いもせず天国を信じていました……（そうでなければ、イエズス会士たちに職場から追い出されたことでしょう）……天使、大天使、座天使、主天使らのいる天国で、三位一体の神を前にして至福のトランプを吹くのが自分の役割だと考えたりしていました……。そして、あなたもご覧の通りです。私はレタスに生まれ変わるために死んでしまい、神は、いや神じゃないな……、誰でもいいが、その人は私が何に生まれ変わる

九一八四二〜一八九八年。スペインの闘牛士。本名はサルバドル・サンチェス・ポベダノ。
一〇一八三四〜一九〇三年。スペインの詩人、政治家。『戦いの叫び』（一八七五年）など。
一一ヴォルテール（一六九四〜一七七八年）は、フランスの小説家、啓蒙思想家。本名、フランソワ・マリ・アルーエ。

か知っています。

亡霊三　がっかりするのはいつでもできますよ…それでも、ここは悪くないですよ…唯一ときどき恋しくなるのは、あなたも
うお分かりでしょうが…非常に馬鹿らしいことですが、女性たちです。女性ほど、陽気で、元氣が出て、魅力的なものはあ
りませんよ！

亡霊二　レタスになって以来、女性のことは忘れてしまいました…。

亡霊三　みんなとあの木の枝の下へ行きましょう。お分かりでしょうが、そうしないと露が降り始めたら我々のもやが消えてし
まいます。

亡霊二　（立ち去りながら）／一粒の露が恐ろしいほどの重みをもっていることだ！

（亡霊たちは皆、柳やユーカリの下へ避難する）

亡霊三　露で濡れないように、枝の陰にお入りなさい。

亡霊四　何と疲れた！こんなに歩いたり飛び回ったり、ぐったりです。しかも、ここではお茶を飲む習慣がありません。こんな
に礼儀知らずの人たちを見たことはありません。

亡霊五　そうです、お茶を飲む習慣がありません！

亡霊四　そして、お茶は人生において非常に重要なのです。

亡霊五　一番重要ですよ。私は神が存在しようがしまいがどうでもいい、私が欲しいのはお茶なのです。

亡霊四　たっぷりのお茶ですよ。

亡霊五　砂糖が入っていないとしても。

亡霊四　もちろん、お茶は砂糖を入れないで飲むべきですよ。砂糖はお茶の良さを失わせ、台無しにするのです。お茶の良いと
ころは苔の味がすることです…、そして…。

亡霊五　お茶は土の味がします！

亡霊四　すみません、レモンの味がするんですよ！

亡霊五　結局、私たちは味は覚えていませんが、お茶が欲しいのですよ！

亡霊四 それに、お茶を飲めばリユーマチにもかからないでしょう。

亡霊五 何だか私は脚が痛むようです……！

亡霊四 私も、あはは……。私たちは狂っていますね。私たちに脚なんかありますかね？

亡霊五 私たちは狂っていますよ！

亡霊一 （大声で）／亡霊の皆さん！別の空間から使者がやって来たところなのですが、無限の空間の遠く離れた片隅でキリストと出くわしたところ、彼は父なる神の王国へ行く道がどれなのかかわからないと正式に発言したことです。キリストは父なる神のことは名前しか聞いたことがなく、もし私たちが全知全能の神のもとへ行く道を見付けたら、すぐに使いを送って知らせしてほしいとしきりに頼んでいたとのことですよ。

亡霊三 君は私たちに間違った道を教えたね。私たちを導くのにはふさわしくないね。

亡霊二 こんな迷宮では誰でも道に迷いますよ。

亡霊一 私は亡霊の皆さんには、忍耐強くいるようお願いしたいのです。最後には神の王国が見つかることは私が保証しますよ。

年老いた亡霊 そうだね、でも、私らには一生見つからないでしょうよ！それに、私らは何度も同じ道を通りましたしね……！

亡霊一 亡霊の皆さん、私のせいではありませんよ！

亡霊二 私はまるでマドリードにいる時のように、くつろいでいますよ。

亡霊三 私はパリにいる時のように！

亡霊五 それで、あのお茶は？

亡霊四 私たちがリユーマチになってぼやいているって後から言われるでしょうね。

亡霊一 集会では静粛に！あれは何の騒ぎですか？

亡霊三 このさまよえるグループに対して一人の魂が「ママ」、生まれ変わりのために地上に落ちたところなのです。

亡霊一 誰の魂ですか？

亡霊三 マラゲーニャを歌っていたスペインの大臣の魂です。私は彼のことはよく知っていました！

亡霊一 覗いて見て下さい。どこに落ちたのです？

亡霊二 アンダルシア「に」落ちました。

亡霊五 アンダルシアではお茶を飲む習慣はありませんね。

亡霊一 で、何に生まれ変わったんです？

亡霊三 まだ妊娠中です。その子は生まれたら詩人になるでしょう。

亡霊一 耐え難い詩人になることでしょう。

亡霊二 私もそう思いますよ…。

亡霊一 私たちは旅に出ましょう。もしかしたら運に恵まれるかもしれません…。遅れてきた亡霊たちを呼んでください。

亡霊四 なんと退屈な！

第二幕

（柳の枝は力なく揺れる。噴水の水には魂はいない。亡霊たちはみな馬鹿馬鹿しい議論をしながら揺れる）

ソクラテスの亡霊 あなたの言うことは信じられん。信仰の手本を見せてくれるから、私はあなたを尊敬し愛しているが、どの道も同じだし、どの道も私の希望を萎えさせる。もう私は諦めているのだ。

亡霊六 君は、生前ソクラテスだった。私は君に闇の中でもソクラテスのままでいてほしいよ。信じてくれ。私はこの辺の野原のすぐ近くに神々の庭園があるのをかすかに見たか、夢見るかしたんだ。私は信じているよ。キリスト教徒のふりをした亡霊や、自称キリスト教徒の亡霊にはついて行くなよ。私が君を幸福の庭園に連れて行くよ。

ソクラテスの亡霊 あなたはいつも私を追いかけて、元気づけようとするね。私の情熱はすべて消えてしまったのに…。世界は持ち主のいないおもちゃのようなものだ…。私は、猫、次に蛙、その次に花、そして亡霊に生まれ変わったが、再び人間に生まれ変わるだろう、その次には…。そして、何とも恐ろしいのは全てを記憶しているということだ。これは永遠に終わらないひどい屈辱だよ…。

亡霊六 その噴水の水に居残ってればいいのだよ。アポロは近くにいるんだから…。

ソクラテスの亡霊 私も他の大勢と同じように混乱の日々を続けるよ…あなたはこの庭園に残って、幸せを探せばいい。

亡霊六 いや、だめだ。私はあなたを無理にでも追いかけるからね！

ソクラテスの亡霊 あなたは誰なのだ？

亡霊六 あなたの昔持っていた信念だよ。

ソクラテスの亡霊 われわれは完全に離れ離れになってしまった…。

亡霊一 亡霊の皆さん、われわれが雲に登るときがやってきました…！

亡霊二 上へ行きましょう。「人を妬むことも人から妬まれることもなく生きよう／天が与えてくれる静寂の中に」三

亡霊三 何ですか？

亡霊二 ヌニエス・デ・アルセの作品です。

亡霊三 ああ！

亡霊一 お急ぎください、亡霊の皆さん、雲は素晴らしいですよ！神への道も見つかるかもしれませんし…。

亡霊三 湿気で分かりますよ！

ソクラテスの亡霊（上りながら）／あなたはリューマチを患っておいでですか？

亡霊三 少し痛みますよ。

亡霊一 行きましょう！

（亡霊たちは、退屈そうに、みな上って行く。夜が明け始め、木々は寒さと朝焼けの色に揺れる…ゆっくりと太陽が昇り始める。庭師とその息子が大きな鍬を抱えてやってくる）

子ども すごくきれいな朝だね。寒くもないし。

庭師 今日木を三本植えようか…。／（考え込んで）／臭わないか？

子ども どんな臭い？

庭師 硫黄のすごい臭いがある。

子ども それって何の臭い？

庭師 わからないな。
子ども 僕もわかんないよ。

(二人は十字を切って、庭を掘り起こしはじめる)
一九二〇年二月九日

エホバ (Jehová) 二三

(雲の幕。ピンク (死んだ子供の手に付けるリボンの色に似たピンク) に薄く塗られたボール紙の枠。舞台中央には中世風の二脚のスツールとモダンな肘掛け椅子 (バレンシアのある工場の製品)。奥にはブリキのりんごのなった木製の木。おそらく緑のガーゼ製の蛇がいる (作品のフィナーレに用いる効果のために電気の仕掛けがついていることが望ましい)。

トランペットたち (石化したトランペットのベルが覗く) / タタタアア、タタタアア！
声 そこから動くな！
トランペットたち タタタ、タアアア！

(エホバが威厳に満ちた様子で、不機嫌そうに登場。化粧を落として、シンデティコン社の接着剤で羽をくっつけた年老いた天使が彼の後ろについてくる)

天使 主よ、ここならお休みになれます。気温もちょうど良いですよ。

一二 題名はエウティミオ・マルティンによる。

一九二〇年三月六日より書き始め。

エホバ (くしゃみをしながら) / ハックション!

天使 シャワーで調子が悪くおなりですか?

エホバ 今日は水がとても冷たかったから、多分風邪をひいてしまった…。

天使 あとで、お休みになるときにテレビン油を塗って差し上げましょう…。お気を付け下さい、この時期にあなたのお歳でひく風邪はたいへん危険ですから。かわいそうな聖ミゲルのことを思い出してください!

エホバ 奴の死は恐ろしかったな。わしの長い人生でもあんな肺炎は見たことがなかった…。わしの力も地獄の医者谁也奴を死から救うことはできなかった。 / アガア! / (あくびをする)

天使 退屈しておられますね。

エホバ 聖人よりもな。

天使 (ウィンクをしながら) / ご報告いたしますが、「私を食べてください」と言っている若い女性の天使が三人、やって来たところでございます。御前に三人を連れてまいりましょうか?

エホバ (ため息をつきながら) / ああ! わしが若い頃、顔にしわがなくてかなり複雑な機械を計算「?」していた頃だったら、それもよかった…。今や動く気すらおきん…。それに、口紅を塗った姿でやってくるんだらう。わしが若い頃は、女の天使たちはもっと自然体だった。人間のまねをしようという病的なこだわりがわしの天国に入ってきて以来、わしらは残念なくらい墮落した。それに、人まねは軽蔑すべきことだ。

天使 主よ、全くその通りでございます。しかしながら、若い天使たちは、上を見ることができませんので…。

エホバ (自分自身に腹を立て) その通りだ! ここでは天井に頭がついてしまう! なんと窮屈な! 遠くの一本のトランペット なんと窮屈な!

天使 (故意に「?」、話を続ける) / 彼らは下を見なくてはならなかったのだ、人間たちを見たのです…。あなたの素晴らしき創造物を!

エホバ (傍白) / (誰だか忘れてしまったが、ある男性の身代わりをしたことがあったな。私はほんの子どもだった…!) / (大きな声で) / しかしながら、絶対に古い習慣を崩すべきではなかった…。おまえ自身もだ…。なんで口ひげをしているんだ? 誰にヘアピースをつけるように言われたのだ…?

天使 (当惑して) / 主よ…!

エホバ しかも、おまえは許しがたい臭いをさせているぞ。昔はわしの天使たちは哲学、形而上学、詩の香りをまっていたものだ……わしの名において。だが、今ではお前たちはオーデコロンや、はてはエーテルの香りをまよっているのだ。虚飾だ！
虚飾だよ！

蛇 (体の内側から照らされ) / 虚飾だ！虚飾だよ！

エホバ 電気を切りなさい、その古いがらくたがこれ以上金切り声をあげないように！

蛇 (明かりを消しながら) / 古いがらくた！

エホバ (腰を下ろしながら) / ちょうど昨日、お前が勧めてくれた体操をしているときに、わしの雲の前をカラーニャス^{一四}風の帽子をかぶった若い天使たちの一団が通るのを見たぞ。闘牛士の服装をしていた者もいた。そして、これだ。ばんざい、わし！牛と違ってわしをあしらうことは出来んぞ。

天使 おそらくアンダルシアの殉教した聖人たちだったのでしょう。この頃、天に大がかりな愛国的な動きがあるのが目につき
ます。一昨日、聖ルカの牛^{一五}が二人のバンデリジェーロ^{一六}と夜明けを迎えたことはお聞きになりませんでしたか？

エホバ だが……

天使 聖トマスがシルクハットを注文したことは、お聞きになりましたか？

エホバ なんと大それたことを！そんなのは不衛生ですらあるぞ！

天使 さらに、聖クリストフォロスはボクシングをしていますし、聖ゲオルギオスはテニスをしします。

エホバ (怒って) / 黙れ！黙れ！息が詰まる！ / (咳の発作に苦しむ)

天使 (優しくエホバの背中を叩きながら) / さあ！さあ！このウスベニタチアオイの飴を召し上がってください。咳がかなり
おさまりますよ。

エホバ (すすり泣きしながら、咳き込んで) / ああ、シナイのあの良い時代はどこに行ってしまったのか！ホレブ山の柴の燃
えていた^{一七} 幸せな日々は。

一四 アンダルシア州ウエルバ地方の町の名前。

一五 牛はルカのシンボル。

一六 闘牛の鉢(バンデリージャ) 打ち。

一七 モーゼが神の山ホレブに行った際、柴の間で燃え上がる炎の中から天使が現れた。柴は火が燃えているのに燃え尽きず、その火の中からは神の声が聞こえた。「出エジプト記」三：一二六、「使徒行伝」七：三〇〜三四参照。

天使 (悲しそうに) / 主よ、その頃、人間はまだマッチを發明していませんでしたから。

エホバ ああ、火の神秘が壊されてしまった! / (目をぬぐいながら) / 真珠の涙を流すなんて、いまましいことだ! 私は自分のパン種^八を全て与えてやった! 自分のパン種のすべてをだ! わしは灰でいっぱいだ! もう、空に星を掛けることはできない! 永遠を肩に載せていたが、もう永遠は崩壊してしまった! / (頭を掻きむしる)

天使 ああ、主よ! 人間は永遠を手にして、「X」と呼んでいます。

エホバ エックス!

トランペットたちのこだま エックス、エックス、エックス。

(舞台奥全体がジグザグの形をした光で照らされる)

エホバ しかしながら、永遠はわれわれの息を詰まらせるこの恐ろしい天井の向こうで手つかずのままだ。

天使 主よ、落ちていてください!

エホバ ああ、私のお気に入りの星たちよ! スポーツマンの天使たちが金星をボールにフットボールをしていることは知っているが…。だが、非常に悲しいことに、わしは人間が優れていることを認めざるを得ないのだ…。おまえがくれたウスベニタチアオイのこの飴が完全に咳を止めてくれたぞ。

天使 主よ、人間は偉大ですよ。ニットのセーターのことも人間に感謝してください。 / (滑稽な様子で近づいて) / …それに、メレンゲも…。

エホバ / (呆けた様子で) / ああ! メレンゲ、メレンゲ! わしは欲しい! メレンゲが…!

(羽根に金色のボタンが二列並んでついている使用人の天使が登場し、エホバにとってもおいしそうな菓子でいっぱいの皿を差し出す)

一八 超越祭では「出エジプト」の出来事を忘れないために、古いパン種を捨て、パン種の入らないパンを一週間食べた後、新しいパン種を使う。
また、「マタイによる福音書」では天国はパン種にたとえられている。「マタイによる福音書」二三・三三参照。

エホバ ／（食べながら）／なんてうまい！なんてうまいんだ！

天使 主よ、不思議ではありません。天では人間のまねをしていますから。

エホバ ／（少し納得した様子、しかし、譲らない）／もしも、無線電信が存在していなかったなら！わしが電気のせいで片腕になって以来、電波にわしらがどんなに傷つけられたか…。／（恐ろしい力の波が、エホバの顔の前の皿をめがけて飛んできて、エホバの顔はメレンゲで汚れる）／ああ！こういう冗談は好かん！わしらをこういう不愉快なことから救ってくれる発明家はいつ天に現れるんだ？／（顔を拭く）

天使 主よ、あなたは全能でございます！

エホバ だが、頭を悩ます種はいらん。後で恐ろしく頭が痛んで、眠れなくなるんじゃ。

天使 アスピリンがございますよ。

エホバ だが、飲まない方がいいだろう。

天使 ／（おずおずと）／あなたの財宝は手つかずのままです！

エホバ ／（爪を噛みながら）／だが、それはわしだけのものだ。一度、その部屋を眺めたきりだ。人生のエッセンスと死のエッセンスが霧でできた何台かのサイドボードにしまわれていた。わしは、ひと瓶かふた瓶、吸いこんだだけだ。わしは自分のことが恐ろしくなった…。哲学の温室も眺めたが…、すべての種類の花があった、しかし、全て影にしまわれているべきなのだ。わしが開けてしまったのは若気の至りだった…。

天使 人間はあなたからいくつかのものを盗みました。

エホバ （横柄に）／ハッ、わしの鼠たちが木をかじっただけだ。

人間の声 ／（遠くから）／あなたは存在しない！あなたは存在しない！

エホバ ／（立ち上がりながら）／どういう意味だ？わすらわしい！／（雲のバルコニーから覗いて）／ああ、ならず者どもめ！

人間たちのコロス ／（大きな声で）／あなたは存在しない！あなたは存在しない！

エホバ ／（激怒して）／罪深い人類め！二度目になるが永遠に滅ぼしてやる！

人間たちのコロス あなたはそれを信じているんだな。

エホバ あはあああああ！

トランペット タタタタアアア。

(嵐が吹き始める。より良い効果のためにここで用いる松脂は品質の良いものでなくてはならない)

エホバ お前たちを罰し、塵にしてみうために、わしの隠れた財宝を開けよう。皆震え、心臓に手を突っ込み、眼を剝り出すがよい！慈悲はないぞ！復讐の時がやって来た！やあ、天使たち、大天使たち、座天使たち、主天使たち！こっちへやって来い！

(全ての階級の天使たちがやってくる。ボール紙でできていて、眼のところが後ろから照らされている。黒子が操る糸で動く)

皆 我々はこちらにあります。

エホバ / (肩にマントを羽織って、両手を腰に当てて) / わしはすべての人間を殺すつもりだ。
アンタルシアの殉教した聖人 オーレ！

別の天使 しいっ。

エホバ 人間どもはわしが存在しないと信じている。どう思うか？

皆 / (学校の子どもたちのように) / とてもいけないと思います！

エホバ / (怒り狂って、歩き廻りながら) / 今日こそ人間を滅ぼしていやる！

天使 主よ、そんなにお怒りにならないでください。行動に移す前に、良く考えて下さい。サタンとご相談なさった方がよいと思います。

皆 サタンとご相談なさい。

エホバ 奴を呼んで、お前らを満足させてやろう。おまえ、奴を呼びに行け。 / (別の天使に) / おやつとランプを用意してくれ。

皆 栄光よ！ / (退場)

天使 主よ、ありがとうございます！

エホバ このいまましいブリキの三角形には我慢できないほどいらさせられる。そのねじを締めてくれ、あっちこちに

動くんじゃ…。

天使 主よ、なぜ外してしまわないのです？

エホバ 馬鹿者！神性をか？

天使 主よ、申し訳ございません。

エホバ ／（肘掛け椅子に腰を下ろしながら）／今のうち、サタンが来る前に、ゆっくり昼寝するでしょう。その棚から本を一冊持ってきてくれ、すぐに眠りにつけるようにな。大量の文章ほど、眠気を誘ってくれるものはないのだよ。

天使 ／（腹を立てて）／主よ、私が文学博士だったことをお忘れです。

エホバ 腹を立てるのは馬鹿らしいぞ。大学教授みたいに見えるぞ。

天使 本をどうぞ。

エホバ ／（読みながら）／カント、『判断力批判』…。はっきり言って、この男の言うことは分からん…。しかもドイツ語で書いてある。

天使 人間も皆同じことを言っております。特にスペイン人たちが…。神ですら理解できない！と。しかしながら、素晴らしい作品です。

エホバ わしはこういう面倒なものは読まないんじゃ。で、この悪党は今どこにいる？

天使 推薦されて煉獄へ行きました。

エホバ あそこならよからう。

天使 別の本です。

エホバ テレサ・デ・ヘスス^九か。髪を振り乱してキリストをたずねてきた狂った女はこいつじゃなかったか？

天使 まさにその女です。今はもっと狂っていますよ。

エホバ 冷たいシャワーを浴びさせてやれ。

天使 多分、お休みになるにはとても面白い冗談を書いた本がよいでしょう…。

エホバ 誰の本だ？

一九一五―一九二二年。スペインの神秘学者で、カルメル会の改革者。『靈魂の城』（一九一七年）、『完徳の道』（一九二一―一九二四年）など。

天使 バリエーション・克蘭^{二〇}です。

エホバ ずるがしい奴、ずるがしい奴だ…、だが見てみる、棚のあその隅に眠気を誘うにはぴったりとサタンが勧めてくれた本があるぞ。ええと…。

天使 / (読みながら) / 司祭の フリオ・セサドルですか^{二一}！

エホバ / (笑いながら) / とても面白い本だぞ。スペインで聖職者がしていることと言ったら！ / (本を手に取り) / キリストを鎖につないだか？

天使 はい。

エホバ 奴には気をつけろ。ああいう狂人は、思いがけないときにわしらを嫌な目に合わせるからな…。

天使 嚴重な見張りがついています。

エホバ おまえ、詩人たちの小屋には入ったか？

天使 入りました。

エホバ アルコールをかけてやったか？

天使 レタスも。

エホバ それならわしは休むとしよう。

天使 ご自分で眠りの番をなさいませ。

エホバ 世界の音量をミュートにしてくれ。

天使 (あきらめて) / いたしました。

エホバ / (夢見ながら) / …この蠅どもめ…。

天使 今日は何でしつこいんだ！

(暗転)

二〇 一八六六～一九三六年。スペインの小説家、劇作家。『ソナタ』四部作(一九〇二～五年)など。
二一 一八六四～一九二七年。スペインの研究者、作家。『カステイリヤ語とカステイリヤ語文学の歴史』(一九一五、一九二〇年)など。